佐々木邦「トム君サム君」を読む

藍木大地

1　はじめに

昭和六年、満州事変が勃発し、そして翌昭和七年には上海事変が起こる。こうした一連の事件もあって、アメリカは日本に対して威圧的な措置をとるようになっていく。そのため、日米関係の緊張は高まり、日本国民の反米感情も高まっていった[1]。

そうした情勢の中、昭和八年、『少年倶楽部』誌上に、とある作品が連載される。佐々木邦の「トム君サム君」である。同作は、日米の少年たちの交流が描かれた少年小説で、時勢を顧みずに日米協調といったテーマで小説を書いた佐々木邦の先進性は、現代に至っても高く評価されている。ただ、これまで同作は紹介されることはあっても研究対象とされることは少なく、それ自体が分析されたり、考察されたりすることはあまり多くなかった。

本論文では、佐々木邦の「トム君サム君」の作品概要をまとめつつ、一つの作品として分析を行っていくことを目的とする。そうした分析を行っていくなかで、掲載誌である『少年倶楽部』の他作品との関連性やその発行元である講談社の意向についても目を向けつつ、作品に表れる佐々木邦の〈ユーモア〉観についても考察していきたい。

2　作品概要

佐々木邦の少年小説「トム君サム君」[2]は『少年倶楽部』誌上で、一九三三（昭和八）年一月号（第二十巻第一号）から十二月号（第二十巻第十二号）の全十二回連載された。連

載中の挿絵は河目悌二が担当した[3]。そして連載終了して約一年半後の昭和十年六月に単行本が刊行され、その後、戦後の昭和二十三年十一月には再度単行本化されている。この再単行本化されたものには「まえがき」[4]があり、

この話は、今から十数年前のことです。／日本の少年とアメリカの少年が、となりあわせに住んで、毎日なかよく遊んでいました。その後、国と国とのあいだにおこったことを考えてみると、この少年たちはりっぱなせんかく者です。その後のことはいっさいわすれましょう。日本には新しい時代がきました。今、トム君サム君がおおぜいきます。日本中あっちこっちの都会に安井君本間君のお話がまたはじまるでしょう。

と書かれてある。ここからは、同作がなぜ再度単行本化されたのか、その理由をうかがい知ることができる。同作の単行本化が再びなされたのは、悲惨な戦争を経験したあとで、日米間における協調の重要性を戦前から訴えていた「せんかく者」的な側面が評価されたためなのである。そうした評価もあって、『少年小説大系』の第二十一巻に収められ、少年倶楽部文庫の一つとして文庫化もされている。

では、同作はどのようなストーリーであったのか確認しておこう。まず、各話のタイトルを提示しておく。（丸数字は話数を意味する）[5]

① 絵の手紙
② 日本の紳士
③ 国境なし
④ 進め！　パン！
⑤ 塀の上から
⑥ 仲直り
⑦ 議論家アンクル・ジョン
⑧ 東京見物
⑨ 日米交歓
⑩ サムライ日（デー）
⑪ 置き土産
⑫ 送別会

以下、少し長くなるが、各話を繋ぎ合わせて、梗概をまとめておく。

安井忠夫君と本間一君は仲よしで、家が隣同士である。ある日、隣の家にアメリカ人で双子のトマス・ベンネットとサムエル・ベンネット[6]（以下、前者をトム君、後者をサム君と呼ぶ。）の一家が引っ越してくる。二人は日本語が話せ、安井君本間君とはすぐに仲よしになり、四人の交遊が始まる（①）。

安井君と本間君はトム君サム君との交際が「国際関係」だから「日本の紳士」として振る舞わなければならないと考えていた（②）。お互い交流を深めていくうちに、いちいち玄関に回って遊びに行くのが億劫になったため、「友情に国境なし」と言って、塀を乗り越えて遊びに行くようになった（③）。ある時、お互いの先祖についての話になった。トム君サム君の祖父は、戦争に出て最初に「進め！」と号令をかけたときに銃で太股を撃たれて、病院にかつぎこまれたという。トム君サム君の家ではその出来事をことさら武勲のように扱うため、安井君本間君は不満に感じた。そこで、那須与一や熊谷敦盛が自分達の先祖だと法螺をふくのだった（④）。

トム君とサム君が交互に風邪をひいてしまっていた間、安井君と本間君は些細なことが原因で喧嘩してしまう（⑤）。その二人を仲裁したのは、トム君サム君であった（⑥）。

あるとき、トム君サム君から、日本の文化をアメリカに紹介したいと考えている新聞記者の叔父さんが来日するので東京の観光地に連れていってほしいと頼まれる。アンクル・ジョンは、すぐに議論をしかける「議論家」だった。安井君本間君は日本の文化についていろいろと質問され、困ってしまう（⑦）。安井君本間君は、トム君サム君アンクル・ジョンの三人を明治神宮や乃木神社、泉岳寺などに案内し、赤穂浪士や大和魂の意義について「議論」をする。昼食の時に地震を体験したアンクル・ジョンはひどく狼狽するのだった（⑧）。二人はその後も案内を続け、靖国神社の遊就館を見学したり、浅草で剣劇ものの活動写真を見たりした。道中で「日米戦争論」が話題に上がるが、「戦争なんかないよ」とすぐに話をやめるということもあった。（⑨）その東京見物以来、アンクル・ジョンも含めて五人で遊ぶようになり、侍の恰好をしたり、おもちゃの刀で遊んだりして交流を深めた。（⑩）。年末、アンクル・ジョンがアメリカへ帰ることになった。アンクル・ジョンは「置き土産」として「議論」の大切さを安井君本間君に説く（⑪）。二人は楽しかった日々のお礼としてアンクル・ジョンの送別会を各家庭で開いた。会に同席したトム君サム君はアンクル・ジョンに「喧嘩をしない

代わりに議論をする」と約束するのだった（⑫）。

3　先行研究

「トム君サム君」に対してはこれまで、アンクル・ジョンの登場を境として、物語の前半と後半とのどちらかに重きを置いた見方が多くなされてきた。

まず、連載中について考えてみたい。『少年倶楽部』の読者投稿欄である「誌友クラブ」では、同作に対する感想やトム君サム君の二人のイラスト[7]がたびたび載せられた。また、「久平新聞」というコーナーでは、「記念スタンプ」として、トム君サム君の顔が描かれたスタンプが紹介されることもあった[8]。さらに、十一月号では、同誌の創刊二十周年を記念して「少倶珍妙野球戦」という特集が組まれ、トム君サム君の両人がオール小説軍のメンバーとして選抜されている[9]。一方で同号の「少年倶楽部愛読者大会速報台」内では、斎藤五百枝の描く作品についてアンクル・ジョンが驚き、近々訪問する、という記事が載せられている。以上のことから、同作の連載中は基本的には、タイトルにもなっているトム君サム君が主要登場人物と扱われつつも、アンクル・ジョンの登場後はキャラクターの面白さから、スポットが当てられるようになっており、前半・後半のどちらかに重きを置くということはされていないことがわかる。

ただし、単行本が刊行されたときの広告文（宣伝文）を見てみると、前半のほうに重きが置かれるようになる。『少年倶楽部』昭和十年七月号では、同作の単行本化を二色刷で宣伝しており、以下のような内容説明が付されていた。

> 元気で愉快な本間君、安井君の二少年と、快活で奇抜なアメリカの少年、トム君、サム君といふ双子の兄弟を中心に、大勢の人物が出て来て、トテモ面白い大事件を捲き起す。何事も腹と背ほどもちがふ、日本人とアメリカ人だから、総べてがアベコベだ。

また、同号以降にたびたび掲載された、「安くて面白い名作少年小説」と名のついた、同誌に連載された主要作品の単行本を宣伝する欄では、次のような紹介がなされている。

> アメリカ人の双子の兄弟、トム君とサム君、ふとしたことで、仲好しになつた本間君と安井君、とかく物事が

アベコベとなつて、何をやるにも勝手が違ひ、忽ち大失敗や大騒動、愉快な大笑。

二つの広告文ともにアンクル・ジョンと子ども達とのやりとりについてはほとんど触れられていない。アンクル・ジョンは前者では「大勢の人物」の一人となり、分量が少ない後者に至っては、存在すらも省かれてしまっている。

こうした、アンクル・ジョン登場後の物語ではなくトム君サム君と安井君本間君とのやりとりを重要視した読み方は、広告等の影響もあってか、戦後に至っても広くされている。

岡崎久彦氏[10]は阿川尚之氏との対談で、同作を「いい作品」だと紹介しているのだが、「なんでもない中産階級の隣にアメリカ人が引っ越してくる。トムくん、サムくんと日本の子供が仲良くなって、なんてことはない、いろんなことをするだけの話です」と内容については少年同士の交流のみの言及にとどまっている。また、佐藤忠男氏[11]に至っては、同作を評価しつつも、アンクル・ジョンの名前は一切出さないばかりか、実際はアンクル・ジョンが作中で起こした出来事も、すべてトム君サム君がしたことに記憶が変わっている。それほど、アンクル・ジョンというキャラクターの存在感よりも少年同士の交流のほうが印象に残っていたのだといえる。

一方で、後半を評価する例としては、羽鳥徹哉氏[12]が挙げられる。

アンクル・ジョンは、何かにつけて、すぐ質問をする。また大変な議論好きである。ジョンさんが来る前から、日本とアメリカの違いはいろいろ話題になっていたが、ジョンさんが来たことで、そのことに更に拍車が掛かった。／安井君達は、議論はいやですよということで案内を引き受けたのだが、何かというと直ぐジョンさんは質問をし、質問は議論に発展する。／そういう議論を通じて、東西の違いに眼を開かせ、日本人の反省すべき点も明らかにしていこうというのが、この作品のねらいである。

また、羽鳥氏は作中の、本間君が議論をしかけてくるアンクル・ジョンに「それはもう議論ですよ。僕はもう帰ります」と言った場面を取り上げ、当時の日本社会の一般的傾向に逆らわないようにする点に佐々木邦の工夫を見て取っている。

羽鳥氏の、同作の「作品のねらい」が「東西の違いに眼を

開かせ、日本人の反省すべき点も明らかにしてい」く点だとする意見については、高橋康雄氏[13]も近い内容のことを述べている。高橋氏は、議論が交わされたことについて、「子供などにとって手におえる問題ではない」としつつも、「やぼな考えと少しましな考えとをぶっつけて読者に何か悟らせ」ようとする展開は、「佐々木邦の独壇場」だと評している。

ただ、注意すべきは羽鳥氏も高橋氏も考察の意図が、その作品自体の分析にあるのではなく、佐々木邦の作品に共通する特徴を抽出する点にあることだ。つまり、「トム君サム君」においても、他作品との関連性がない点はあえて捨象している可能性がある。

さて、ここまで前後半で分ける読み方についてまとめてきたわけだが、もちろん、二分せずに作品を紹介する例もない訳ではない[14]。『佐々木邦全集』の「解説」を担当した尾崎秀樹氏[15]は同作の内容を、前半に後半の内容を足す形で紹介している。ただ、この尾崎氏の紹介は、前半に後半の内容を足しているだけとも言え、それはすなわち前半と後半とで内容が分かれているとする読みと相違ないようにも見える。

確かに連載小説の場合、読者の記憶は一話ずつ積み重なっていくのだから、前半から登場している、気に入ったキャラクターを中心に作品を読んでいくのは当然のことである。しかし、単行本化されて、一つの完結した作品として読み返すことが可能になった場合、連載中とは異なった読み方も可能になるはずである。次節では、先行研究とは異なった視点から、同作を読み解いていきたい。

4〈差異化〉と〈相対化〉

同作を統一的な視点から読み解いてみるとどのような解釈が可能となるのだろうか。

その鍵となる一節が、第十二回「送別会」の末尾にある。同作全体のラストとなる場面である。

「アンクル・ジョン。」
とサム君が呼んだ。
「何だね？」
「喧嘩をしない代りに議論をします。」
「議論ならよろしい。」

この場面のサム君の発言にある「喧嘩」と「議論」という

のは、実は作品の前半部にも出てきていることばであった。

まず「議論」について確認しておこう。「議論」ということばが同作で初めて出てきたのは、第二回「日本の紳士」でのことだった。庭の池に出てきたスッポンを捕まえた四人は、そのスッポンを殺すか逃がすかで話し合う。議論はだんだんと「熱心」なものになり、両派はまったく譲歩しなくなって、解決が見られなくなってしまう。そこで、「喧嘩になると困る」と案じたトム君が「賭をして定めよう」と提案し、サム君も賛成する。ところが、安井君が「いけない」と反対する。理由を問われた安井君は、こう説明する。「賭で定めたんじゃ、今までの議論が無駄になる」と。そして、本間君も賛同し、「日本人は賭をしません」と二人に伝える。実は、同作においてはじめに「議論」の大切さを述べていたのは、日本側の安井君本間君だったのである。

さて、この場面でも「喧嘩」ということばは見られる。「賭」は「喧嘩」を回避するための方策でしかないのだが、そうしてしまっては、それまでの「議論」、すなわちお互いで交わされたコミュニケーションが無になってしまう。その点を理由に安井君本間君は反対しているわけだ。

ところが、その二人であったとしても、その後「喧嘩」をしてしまう。この二人の「喧嘩」は、第五回から第六回にかけて起きている。このとき喧嘩の発端となったのは、二人でボール遊びをしていたときに、本間君がボールを取りに行かないことだった。安井君はそうした本間君の行動に不満を持ち、本人に直接伝えたのだが、了承してボールを拾ってきた本間君の態度は、どこか人を小馬鹿にしたようなものだった。その様子に安井君は腹が立ってしまい、言い争いの末、二人は絶交してしまうのだった。この「喧嘩」は数日続いたが、途中で二人とも「喧嘩」のきっかけとなったやりとりを思い出し、後悔している。安井君は本間君に失礼な態度を取られたとしても笑って済ませばよかったと思い、本間君は喧嘩後に声を掛けられた際に無視しなければよかったと思っていたのだった。つまりは、両者の「喧嘩」が始まり長引いたのは、相手を許したり反応したりするというコミュニケーションが足りなかったからだといえる。

この二つの場面からわかるのは、日本側は「議論」の大切さを分かっていながらも、その「議論」におけるコミュニケーションの方法をわかっていないために「喧嘩」を起こしてしまったということだ。

こうした出来事があった上での、先述した後半部にあるア

ンクル・ジョンが「議論」の大切さを説く場面なのである。そして、第二回で「議論」を軽視していたトム君サム君が、ラストで今後は「議論」をすると発言するのは極めて示唆的である。

以上の観点から作品を読んだとき、同作の全体的な構成が見えてくる。アンクル・ジョン登場後の内容は、前半の内容を自己言及的に〈差異化〉し、〈相対化〉する役割を担っていたのだ。後半の内容は、決して、ただ単に付け足されたわけではないのである。

同様の構図は、作中にちりばめられている。

まず前半後半の「大人」の存在である。前半で登場した大人と言えば、トム君サム君の父親が挙げられる。この父親が初登場したのは、先に紹介した、トム君サム君が「賭」を提案したあとだった。父親はスッポンを見つけると、「スナッピング・タートル」と言って、池の中へ投げてしまう。そして、語り手はこのように述べる。曰く「これで問題も議論も一遍に解決してしまつた」と。つまり、この父親は「議論」をしないままの解決策を、少年たちに見せつけたわけである。その後、この父親は第三回でも登場する。その場面では、父親の祖父が戦争に志願兵として出征し、功績を挙げたことを教えてくれる（その功績については、安井君本間君は功績と呼べるものか疑問に思っていたが）。

この父親を〈差異化〉し、〈相対化〉するのは、アンクル・ジョンである。

アンクル・ジョンは、「議論」の大切さを述べた場面を見てみよう。

> 世の中は人間の顔が一つ〳〵違ふやうにそれ〴〵の意見が違つてゐて、議論を闘はすから、進歩するんですよ。議論は世界の推進機です。皆が同じやうな考を持つてゐた日には、いつまでたつても同じことでせう？

アンクル・ジョンが「議論」の重要性を訴える際に相手として念頭に置いているのは、決して日本人だけではない。対象としているのは「世の中」全体なのである。実はトム君サム君の両親も「議論」を忌避していたのだ。第十一回でアンクル・ジョンは、トム君サム君の父親と二時間以上「議論」したときに、「もうい、加減にしろ」と怒鳴られたエピソードを明かしている。そんな父親に対して、アンクル・ジョンは「辛抱が足りない」と評している。なぜこのような評価に

なったかといえば、アンクル・ジョンが編み出した、「議論」に負けない秘訣が関係している。その秘訣とは「議論」の最中は常に「ニコ〳〵しながら話すこと」だった。

こうした秘訣があれば、どんなに「議論」が長時間になろうとも、論者たちは感情的にならない。「喧嘩」に発展することはないのだ。前半部分で安井君本間君たちが理解できなかった「喧嘩」の解決策としてのコミュニケーションの方法を[16]、読者は知ることになるのである。

また、後半が前半を〈差異化〉し〈相対化〉するという構図は、安井君本間君の考えにも見られる。第九回で、トム君サム君アンクル・ジョンの三人を東京見物に連れていたときのことだ。アンクル・ジョンから「議論」を仕掛けられたあと、二人は次のように感じる。

> 安井君と本間君は案内役を勤めながら、自分達の知識の不精確を感じることが多かつた。よく知つてゐるつもりでも、突つ込んで聞かれると分らなくなる。

この部分と対照性をなす前半部は、第四回にある。安井君本間君はトム君サム君に対して、自分たちの先祖が那須与一や熊谷直実、平敦盛だと法螺を吹いた。これはトム君サム君がそのような日本の古典を知らないと侮っていたからだ。しかし、トム君サム君に見事に看破されてしまうというオチになる。一見するとこのオチのためのエピソードに思えるが、「知識の不精確」を知る後半部と対応させるとどうだろうか。国内に住み、学校で習っているために、日本のことなら何でも知っているという思い込みを見事に〈差異化〉し、〈相対化〉しているとはいえないだろうか。単にトム君サム君に知識があったというだけでなく、日本人であったとしても、知らないことがあり、相手に説明できないことがあるということを描いているのだ。

このように、「トム君サム君」の作品全体を通して見ると、「議論」することの特別な意味が読者に提示されていることがわかる。それは、「議論」をただ目的もなく長く続けることではない。あるいは相手といたずらに勝負し、論破することを推奨しているわけでもない。「議論」を通しての適切なコミュニケーションをとことんまで行うことの必要性と重要性なのだ。質問の形をとって相手の意見を引き出し、そして自分の意見も述べる。論者の二人に必要なのは、相手を知ろうとする姿勢と、自分の考えを適切に言語化する能力である。

ところで、「議論」以外にも、〈差異化〉や〈相対化〉が用いられているエピソードも存在している。それは第五回で本間君が話した「嘘」についての見解である。本間君は「嘘じゃないよ。法螺だよ。嘘はいけないけれど、法螺は冗談だ」と話す。この回では「嘘」の対立項として「法螺」しか出てこない。ところが、後半の第八話になって、「謙遜」が対立項となって出てくる。東京見物をしていた五人が洋食屋に入った折、トム君サム君が「何もございませんけれど、どうぞ」「詰まらないものですけれど、どうぞ」と料理を安井君本間君に勧めた。そうした「謙遜」をする日本の礼式に対して、アンクル・ジョンが「変だね。さういふことをいふものだから、日本人は嘘をつくなんて誤解されるのかも知れない」と危惧する。こうした後半の一連の流れを前半の流れと合わせて読んだとき、読者は「嘘」も「法螺」も「謙遜」も主体者の主観的なものと気付かされるだろう。悪気がなく行なった「法螺」や「謙遜」も、そうした文化を知らない人間にとっては「嘘」となってしまう恐れがある。同作では、こうした思い込みや常識に対する〈差異化〉と〈相対化〉も描かれているのである。

以上のように、同作は個別的な出来事がただ並べられているわけではなかった。前半の内容を後半の内容が、いくつかの対立項を用いて、〈差異化〉し〈相対化〉していたのである。そして、そうすることで、さまざまなエピソードが有機的につながり、コミュニケーションのあり方や、自身が過ごしてきた文化を対象化し、考え直すことの重要性を読者である少年たちに提示していたのだ。この提示こそが、「トム君サム君」の主眼だったのである。

5　『少年倶楽部』との関わり

この節では、少し趣向を変えて、「トム君サム君」を連載していた『少年倶楽部』やその発行元である講談社について目を向けてみよう。

同作が連載される昭和八年前後の出版界では、日米戦争論や日米架空戦記ものが数多く発表されていた。主な日米戦争論[17]としては、石丸藤太『日米果して戦ふか』『昭和十年頃に起る日本対世界戦争』、財団法人有終会『米国海軍の真相』、そして平田晋策『われ等若し戦はば』が挙げられる。平田に関しては『少年倶楽部』誌上において、昭和七年に「日本若し戦はば」を発表している。一方、主な日米架空戦記[19]とし

ては、福永恭助『科学小説　暴れる怪力線』や浅野一男『空中軍艦未来線』、そして海野十三「防空小説　空行かば」が出版・発表されている。

亀井俊介は明治以降の日本がアメリカに対して、「拝米」と「排米」の姿勢を繰り返してきたと述べる[20]。昭和八年前後は、それ以前に起きた満州事変や上海事件によって、「排米」意識が国民の中でも膨らみ、アメリカとの戦争が現実味を帯びてきた時期だと位置づけることができよう。

当然、同時期の『少年倶楽部』誌上でのアメリカに対する態度も「排米」が強かったといえる。実は、「トム君サム君」連載前、アメリカを敵対視する小説が掲載されていた。佐藤紅緑「少年連盟」[21]である。

佐藤紅緑は同時期の『少年倶楽部』において、佐々木邦と同様に現代小説を多く連載し、人気を博していた。この「少年連盟」は、ジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』を佐藤紅緑なりに翻案した作品である。

「少年連盟」において、日本人の大和冨士男とアメリカ人のドノバンはたびたび衝突する。大和冨士男の意見に対して、ドノバンが楯を突いたとき、語り手はドノバンの性格について、次のように説明する。

ドノバンはおそろしいけんまくで、富士男の説に反対した。がんらいドノバンはいかなるばあいにおいても、自分が第一人者になろうという、アメリカ人特有のごうまんな気性がある。かれはこのために、これまで富士男と衝突したのは、一、二度でなかった

ドノバンはいわゆるアマノジャクで、そのごうまんな米国ふうの気質から、いつも富士男を圧迫して自分が連盟の大将になろうとするくせがある。富士男が一同に尊敬せらるるのを見ると、かれは嫉妬にたえられぬのであった

「少年連盟」というタイトルからして、紅緑は国際連盟を意識していたのは間違いない。ドノバンのキャラクター造形は、その国際連盟におけるアメリカの振る舞いを戯画したものだといえよう。

そうした「ごうまんな米国」人であるドノバンに、作品の終盤で大和冨士男は以下のように言い放つ。

アメリカ人が犬であるか、日本人が犬であるか、いま

ぼくがいうまでもなく諸君がわかったろう。諸君、ぼくは高慢なアメリカ人、伝統のないアメリカ人、礼儀も知らず道義も知らず物質万能のアメリカ人、とこういったなら米国人はどんな気持ちがするだろう。おたがいにその国をののしったり、種族をののしったりすることはつつましまなければならん。

その後、大和冨士男がリーダーとなり、各国出身の少年たちを束ねていく。これは当時の読者からしたら快哉を叫ぶ展開だったに違いない。

しかし、こうした佐藤紅緑の作品の連載後、『少年倶楽部』誌上では、ロシアを警戒する記事が増えていく[22]。満州近郊における防備に注目が集まっていたからだ。したがって、読者は、アメリカに対する注意が薄れていったともいえる。

とはいえ、昭和八年になってからも、アメリカを敵対視した記事や作品が完全になくなるというわけではなかった[23]。そうした混沌とした状況の中で「トム君サム君」の連載は始まったのである。同作は、「排米」という考えを持つ記事や作品群の中で特異な存在だったといえる[24]。

同作の第九回で描かれた次のような場面を見てみよう。

『戦争の話はつまらない。』
『いやだよ。仲が悪くなる。』
とトム君とサム君がいつた。安井君と本間君も同感だつた。
「日米戦争なんかないよ。」
と安井君はトム君の手を取つた。本間君もサム君の手を取つて、
「行かう、もう。」

こうしたやりとりを描くことで、当時盛んであった日米戦争論や日米架空戦記を見事に〈差異化〉し〈相対化〉しているのがわかる。そして、この手を取り合うという行動からは、両国は友好的であり、対等な関係を結ぶべきだという理想的な姿が読みとれよう。「少年連盟」における日本がアメリカに対して説教をする場面とは見事に対照的である。

では、なぜ「トム君サム君」のような「拝米」と思われる作品を『少年倶楽部』の発行元である講談社は許可したのだろうか。その理由として、考えられることは二つある。一つは世間に対する自社のアピールであり、もう一つは地方読者を取り込むためである。

当時、日本は二つの国際的な難題に頭を悩ませていた。

まずは、国際連盟を脱退したことにより懸念された、国際的な孤立である。その孤立を回避するために、外務省の中で多くの意見が出されたのが、アメリカとの協調路線であった[25]。その際、フランクリン・ルーズベルトが大統領選に勝利したことは追い風になると考えられた。『少年倶楽部』においても、昭和八年三月号にルーズベルトの大統領当選を祝福、そして今後の日米関係の回復を期待する旨の記事が掲載されている[26]。

また、もう一つの難題として、大正末期から続く不況の改善があった。そこで外貨の獲得が急務となり、いくつかの活動が模索された。そうした活動の一つとして取り組まれたのがインバウンド政策だった。その際、マーケットとして重要視されたのも、アメリカであった[27]。

このインバウンド政策を促進していたのは国際観光局と国際観光協会である。国際観光局は、浜口雄幸内閣の際に観光に関する答申が閣議決定され、昭和五年四月に鉄道局の外局として設置された。そして、それと同時に観光宣伝の実行機関として設置されたのが、国際観光協会だった[28]。

この国際観光協会がアメリカの少年雑誌『アメリカン・ボーイ』誌上で、「なぜ僕は日本へ行きたいか」という題の懸賞作文を募集した。この応募作品の中から入賞作が三作選ばれる。その内の二作品を掲載したのが、『少年倶楽部』であった。

掲載された二作品には「今や両国民は太平洋を越えて、心の底から握手しなければならない時が来ました[29]」や「今度は僕の方から日本へ行つて、日本から少しでも学んで来よう[30]」という親日感情を前面に押し出した意見が見られる。こうした意見は当時の少年読者の「排米」感情を和らげようとする、国際観光協会の意図が汲み取れる。ちなみに、「トム君サム君」において、前者のような意見は太平洋という隔たりがなければ仲良くなれるという設定に、後者のような意見はアンクル・ジョンが研究のために来日するという設定に、それぞれ関連していそうである。

さて、この懸賞作文に入賞した三少年は、その後来日し、文部省などが歓迎会を開いた。そして、入賞作品を掲載した『少年倶楽部』を発行する講談社も、この三少年を招き、歓迎の意を表明している。その際、来社した三人の相手をしたのは講談社社長である野間清治だった[31]。

このような特集を組んだり、歓迎会を開いたりした講談社

が意図していたことは、文部省を代表とした官庁並びに内閣に対するアピールだとは考えられないだろうか。講談社には、自分たちが日本一の出版社であり、日本一の少年雑誌を発行しているという自負があった。『少年倶楽部』誌上においても、昭和八年一月号に、「少倶の社、すなはち大日本雄弁会講談社は、世界三大雑誌社の一つで」あり、アメリカやイギリスといった文明国の雑誌社と並び立つ存在だと顕示している。その同社が日本観光協会とともに企画を推進していたと考えれば、日米間の協調の一翼を担おうとしていたと考えてもおかしな話ではない。

ちなみに、その後、『少年倶楽部』側も「アメリカ少年に出す手紙」を募集し、その入賞作を掲載している[32]。この際、アメリカの少年が読めるように翻訳すると紹介されているのは「ジヤパン・ツーリスト・ビユーロー」だった。この「ジヤパン・ツーリスト・ビユーロー」は国際観光協会とともに、外客誘致を中心に行う実施機関だった[33]。

あるいはこうした政治的なアピールのほかに、読者に対するアピールもあったと考えられる。『少年倶楽部』は多くの読者から支持されていたのは広く知られている。岩橋郁郎は、同誌の自由投稿欄から当時の購買者の在住地の約七十四％が関東以外の地方在住者だということを明らかにしている[34]。

この地方在住者に向けて、「トム君サム君」で描かれた「東京見物」は大きな役割を果たしただろう。

講談社は、時代は少し下るが昭和十二年にその名も『東京見物』という絵本[35]を出版している。その中で挙げられた観光地と、安井君本間君がトム君サム君アンクル・ジョンの三人を案内した場所は重なるところが多い。さまざまな場所で「議論」が行われたわけだが、この「東京見物」の効果は、その「議論」の有効性を明らかにすることだけではないだろう。地方在住者に向けて、日本の中心地である東京の魅力を伝えることにもあったのだといえるのだ。

ところで、「トム君サム君」は、当然、単にアメリカの良さばかりを描出していたわけではない。同時代の日本の風潮を見事に取り入れていることも見逃すわけにはいかない。

冒頭にある、安井君本間君が外で寝転び空を眺めていた際、赤とんぼを飛行機と見立てているシーンでは、当時の飛行機に対する憧憬が描かれているといえよう。また、「日本の爆弾三勇士にはとても及ばない」[36]というセリフからは、当時の爆弾三勇士ブームが反映されていると見てよい[37]。そもそも、安井君本間君が日本の兵隊に対して強い自負心を抱いて

いるのは、昭和前期にあった戦争を美談とした風潮の表れ[38]ともいえる。

また、第九回において語られる、以下のような記述も注目に値する。

国際談判の時は強く出るに限ると聞いてゐたから、丁度いゝ幸ひに、日本魂のやうな顔をしてゐた。

これは、国際連盟を脱退したときの松岡洋右の態度を、本間君が内面化しているといってよい。

こうした記述やセリフがあることで、当時の読者の反発心を抑えられたに違いない。だからこそ、同作は連載が打ち切られることなく、他作品と同じく一年間続いたのだろう。そして、同作を読み進めた読者に対して、〈差異化〉や〈相対化〉の重要性を効果的に提示できたのではないだろうか。

6　佐々木邦の意図

では、この「トム君サム君」には、作者である佐々木邦のどのような意図が反映されていると考えればよいのだろうか。この節では、その意図を随筆や評論などの文言から探ってみたい[39]。

佐々木邦は、戦後になって、日本のアメリカに対する「忘恩」を幾度か非難している。

「恩」と題された随筆では次のように述べている[40]。

日本を現在の窮地に陥れた原因の一つには国際的忘恩がある。日本人は元来恩を重んじる国民だが、それは国内同胞の間のことで国際的には寧ろ恩を忘れるのを愛国心と思い込むように指導されて来た憾みがある。

同様の内容は、随筆「終戦の秋」[41]内にも述べられている。少し長いが引用させていただきたい。

もう一つ日本人に悪いところがある。それは国際的忘恩ということで、矢張り建国伝説から来る誇大妄想に関係がある。我々は個人的には師の恩を重んじるけれど、国際的には寧ろこれを否定する本能を持っている。雅量がない。相手の豪さを認めると、それ丈け此方の豪さが差引かれると思うのらしい。お互の顔に痘痕のないのは何

処の国の人のお陰だろうと考える日本人は一人もない。そういうことは全く忘れている。一事が万事、有らゆる西洋の学問文化の恩恵に浴しながら、感謝の念が少しもない。

明治の初め、アメリカは日本に一粒選りの教師を送った。私の卒業した明治学院はその一人のヘボン博士が創立したものである。

こうした随筆に見られる思想を、佐々木邦は戦前から既に持っていたようだ。その証拠に、「トム君サム君」の中で、アンクル・ジョンに次のような発言をさせている。

ペリー提督が来て日本の門戸を開かせたのですから、日本を誘つて西洋文明国の仲間入りをさせたのはアメリカです。それから日本が西洋文明を研究して自分のものにする気になつた時、い、先生を沢山よこしたのはアメリカです。[42]

もちろん、佐々木邦自身はこの発言を絶対視するようなことはしない。この発言を受けた安井君本間君は一時は納得するが、すぐさま「いつの間にか、日本がアメリカの弟子つてことになつてしまつた」から「損をした」と抗議している。日本国内の意見を取り入れつつ、ここでも見事に〈差異化〉と〈相対化〉がなされている。

さて、佐々木邦がこのように日本の「忘恩」を非難するのは、母校愛が強かったことも大きく関係していよう。先の引用でも、明治学院と創立者のヘボンの名前を書き記していた。

佐々木邦は、もとより、英米学者になる以前に、青山学院時代（十六歳から十八歳）・慶應義塾大学予科時代（十九歳～二十歳）・そして明治学院高等部時代（二十歳～二十二歳）の三つの時代でアメリカ人教師に英語を教わっている。そうした経験が英米学者になったあとも生きていたのだろう。ただ、その中でも特に明治学院に対する母校愛は極めて強いものであった。佐々木邦が編著した『明治学院生活』[43]の「序にかえて」で、次のように述べている。

人は皆故郷を誇りとする。広く言えば、日本人は日本に生れたことを誇りとする。他のところを知らないからだろうが、知ることは愛することで、そこに愛国心が生れる。同じ道理から私は明治学院に学んだことを誇りとし

ている。世間に学校は沢山あるけれど、私は一度として他の学校で学んだらよかったろうと思ったことがない。

ところで、先に引用した部分で「雅量」ということばもあった。この「雅量」という言葉は、佐々木邦の〈ユーモア〉観を考える上で極めて重要である。『現代ユウモア全集』の一冊である『明るい人生』の「はしがき」[44]で、

ユウモアは雅量である。おれも弱い人間だと思へば、人生のこと皆笑へる。昔の名僧知識は修養が積んでゐる丈けに能く笑つてゐる。ユウモアが人生を明るくするといふのはこの意味である。

佐々木邦にとって、日本が戦争に突入したのは、「人生を明るくする」ための「ユウモア」、つまりは「雅量」がなかったからなのだ。「トム君サム君」に敷衍して言えば、相手を認めたり知ろうとしなかったりした結果が「喧嘩」なのだ。安井君本間君が喧嘩していたとき、両者ともに「弱い人間だ」という気持ちがなかったわけだ。

7　終わりに

「トム君サム君」という作品は、一見すると前半と後半がバラバラなテクストに見える。しかしその実、前後半が有機的なつながりを持った作品であることがわかった。そのような有機的なつながりを可能にしたのが、キーワードとなる〈差異化〉であり〈相対化〉であった。このキーワードの根底にあったのは、佐々木邦のコミュニケーションの重要性を伝えたいという信条であり、そして日本の「忘恩」を戒めようとする意識であった。また、同作の価値は、『少年倶楽部』の発行元である講談社のアピールに使われるほど、高いものであった。

手塚治虫は晩年、印象に残った児童小説として「トム君サム君」を挙げている[45]。「トム君サム君」は佐々木邦という作家にとっても、少年小説というジャンルにとっても、ひいてはユーモア小説にとっても、重要な作品であると位置づけることができるのである。

注

1 細谷千博「第5章　真珠湾への道　1931-1941」細谷千博編『日米関係通史』東京大学出版会、一九九六年。

2 第一回が掲載された『少年倶楽部』昭和八年一月号の目次を見ると、「軽快小説」と角書きが付されている。この「軽快小説」には、当時の同誌においてユーモア性の高い小説が分類された。元々佐々木邦の作品は「諧謔小説」と角書きで付されていたが、同誌の意向により変更したものと思われる。この同誌の意向については、加藤謙一『少年倶楽部時代』（昭和四十三年、講談社）に詳しい。

3 佐々木邦の作品における重要性を、清水哲男氏は「佐々木邦ランドの楽しさ」（『少年小説大系』月報29、三一書房、一九九六）の中で述べている。清水氏は、佐々木邦が「登場人物の顔がほとんど見え」ず、服装も住居もわからないという「驚くべき手法」で書いていることを指摘し、読者がそうした登場人物の情報を知っているように思えるのは「河目悌二などの挿絵のおかげでしかない」としている。

4 この文章は無記名で書かれてある。

5 本文の引用は初出に拠る。旧漢字は適宜新漢字に改め、ルビなどは省略したところもある。

6 中垣恒太郎「『トム・ソーヤー』のユーモアはいかに移入されたか」（『ほらいずん』第三十四号、平成十四年）では、この二人の名付けに関して、トム君は『トム・ソーヤーの冒険』の主人公であるトーマス・ソーヤーが、サム君はマーク・トウェインの本名サミュエル・クレメンスから取られたと指摘されている。

7 イラストは例えば『少年倶楽部』二月号、七月号などに、感想類は例えば三月号、五月号、八月号などに掲載された。特に五月号には「少倶十大読物数へ歌」という投稿が採用されており、「トム君サム君ゆくわい者、〈〉」と書かれてある。

8 『少年倶楽部』昭和八年五月号。

9 トム君はトンネルをするなど失策をおかしている。ちなみに、オール小説軍の監督は佐藤紅緑、対する漫画軍の監督は田河水泡が務めるという設定である。

10 岡崎久彦・阿川尚之『対論：日本とアメリカ』廣済堂、平成十四年。

11 佐藤忠男「子どものアイドル」『朝日新聞』昭和五十三年九月九日朝刊号。

12 羽鳥徹哉「佐々木邦のユーモア小説」『笑いと創造　第五集』勉誠出版、平成二十年。

13 『少年小説の世界』角川書店、昭和六十一年。

14 尾崎秀樹氏の他にも、澤田次郎「第二章『少年倶楽部』のアメリカ像」（『近代日本人のアメリカ観』、慶應義塾大学出版会、平成十二年）がある。こちらは全体を通して描かれるアメリカ人の表象について考察がなされている。

15 尾崎秀樹「解説」『佐々木邦全集』第九巻、講談社、昭和五十年。

16 鶴見俊輔氏は、こうした諍いをコミュニケーションによって調停するという展開は佐々木邦の作品の特徴だと述べている（『鶴見俊輔集1　アメリカ哲学』筑摩書房、平成三年）。

17 昭和八年前後およびそれ以後の日米戦争論については、北村賢志『日米もし戦わば』（光人社、平成二十年）に詳しい。

18 石丸藤太は『少年倶楽部』昭和八年四月号に「もし日本が世界を敵としたら」を寄稿している。ここでは国際連盟を脱退した日本とアメリカとの間で戦争が起きる可能

性について対話形式で論じている。

19　同時期の日米架空戦記ものについては、長山靖生『日米架空戦記集成』（中央公論新社、平成十五年）に詳しい。

20　亀井俊介『アメリカ文化と日本』岩波書店、平成十二年。

21　『少年倶楽部』昭和六年八月号から昭和七年六月号にかけて連載された。なお、同作の本文は、少年倶楽部文庫版『少年連盟』（講談社、昭和五十一年）に拠った。

22　田中秀東「児童雑誌『少年倶楽部』における対米イメージ―一九三一―一九三七―」（上智大学アメリカカナダ研究所『アメリカと日本』彩流社、平成五年）。

23　例えば森下雨村「謎の暗号」。同作と「トム君サム君」との比較は、前掲した田中秀東論文で行われている。

24　長谷川潮『日本の戦争児童文学』（久山社、平成七年）によると、こうした風潮は『少年倶楽部』以外でも、同作の連載前後では、豊島次郎『日米大海戦』（金蘭社、昭和五年）や村田義満『少年海戦隊』（高山堂書店、昭和十年）などの影響と考えられる。

25　細谷千博、前掲書。

26　沢田謙「アメリカ合衆国の新大統領ルーズベルト閣下」『少年倶楽部』昭和八年三月号。「日本が大好きといふこの方が、大統領となられたら、日本とアメリカは今までより、一層仲よくなるでありませう」と日米協調の期待が寄せられている。あるいは、当時来日していたアメリカ外交官のジョセフ・C・グルーは、「日本の新聞は一致して選挙の結果をよろこんでいる」と記している（石川欣一訳「ルーズヴェルト選挙さる」「滞日十年　上」毎日新聞社、昭和二十三年）。ちなみに、講談社は大江専一『ルーズベルト』を昭和八年に刊行している。だが、同単行本の広告は同誌において五月号に見られるばかりで、それ以降は掲載されていない。ルーズベルトに対する不信感が高まったことが要因と考えられる。

27　渡辺智彦「近代日本におけるインバウンド政策の展開―開国から「グローバル観光戦略」まで―」

28　野瀬元子・古屋秀樹。太田勝敏「戦前における日本の国際観光政策に関する基礎分析」

29　ドナルド・ジー・ブラッドラー「少年外交官として」『少年倶楽部』昭和八年八月号。

30　ケイ・ストロムキスト「柔道が習ひたい!!」『少年倶楽部』昭和八年八月号。ちなみに、もう一人はミルトン・ウイリアム。

31　『少年倶楽部』昭和八年九月号に、そのときの様子が写真付きで紹介されている。

32　『少年倶楽部』昭和八年九月号で募集し、入賞した三作品が掲載されたのは同年の十月号。

33　渡辺智彦、前掲書。

34　岩橋郁郎『『少年倶楽部』と読者たち』刀水書房、昭和六十三年。

35　『東京見物』講談社、昭和十二年。「講談社の絵本」シリーズの第十七巻にあたる。

36　『少年倶楽部』昭和八年六月号。

37　『少年倶楽部』では二月号の附録が爆弾三勇士の銅像模型であった。また、爆弾三勇士をモチーフにした話は「のらくろ一等兵」でも描かれている。

38　長谷川潮、前掲書。

39　第一回が掲載された、『少年倶楽部』昭和八年一月号には、「この小説は自分でも面白いほど明るくのび〳〵書ける」という佐々木邦の談話が掲載されている。また、同年四月号には読者代表の数名と佐々木邦とが対面した様子が掲載されている。その際、佐々木邦は読者代表に対して「皆さんに、アメリカ少年のお話をしてあげようね」と優

しく話したという。

40 佐々木邦「恩」『豊分居閑談』講談社、昭和二十二年九月。本文は『佐々木邦全集』第十巻に拠る。

41 注40と同じ。

42 『少年倶楽部』八月号。

43 佐々木邦編著『明治学院生活』現代思潮社、昭和二十八年。

44 現代ユウモア全集刊行会、小学館、昭和三年。この佐々木邦の巻が第一回目の配本である。

45 「マンガとの出会い」(『子どもの文化』二十巻七号、昭和六十三年)。

(あいき・だいち　成城大学非常勤講師)